

# 中国とどう付き合っていていくべきか

## 体験的対中外交論(その1)

草 折 づ れ つ 和 令

外交評論家・元外交官

金子熊夫

kaneko@eeecom.org



昨年来、新型コロナウイルスの感染拡大に関連して、中国に対する厳しい批判が、かつてないほど国際的に高まっています。特に日本は地理的に近く、大きな影響を受ける立場ですから、中国問題は政治家や外交官だけに任せないで国民で真剣に考える必要があります。

今回中国は、いち早く国内のコロナ鎮圧に成功したことを誇示しただけでなく、各国がコロナ対策で忙殺されている隙に、まるで火事場泥棒の如くに、南シナ海や東シナ海（尖閣諸島周辺）に進出するなどの実力行動に出ました。そのことを国際的に批判されると聞き直り、自国外交官に対し、徹底的に反撃せよ、恐縮したような姿勢は一切示すなど訓令を発し、これを彼ら自身「戦狼（せんろう）外交」と呼んでいます。卑近な表現をすれば、まさに「盗人猛々しい」というほかありません。

最近では、中国は国産ワクチンを大量に外国に輸出し、それを勢力拡大の手段に使っているとみられる節があります。「一帯一路」政策はそのための隠れみみという見方も決して的外れではありません。

特に今年には、中国共産党の創設100周年で、習近平指導部は今年を重要な節目の年と位置づけています。これからさまざまな強引な手を打ってくるでしょう。その都度、一喜一憂し過剰反応することなく、中国の出口を冷静に見極める覚悟が肝要です。その時に必要なのは、中国を、そして日中関係を、長い歴史の流れの中で大局的にかつ多面的に把握することです。

ということですから、数回に分けて「日本は中国とどう付き合っていくべきか」という大テーマについて考えていきたいと思えます。

とは言っても、この限られたスペースで長く複雑な日中間の歴史と現状を網羅的に論じることが到底できませんので、ま



吉田茂氏

ず手始めに、私自身の中国とのこれまでの付き合いについて、いくつかの個人的体験やエピソードを交えながら、お話ししていくことにします。

### 吉田元首相と加藤紘一君の思い出

30年に及ぶ外交官生活の中で、中国問題だけを特別に担当したことも、北京や上海などに長期在勤したこともありません。実は、外交官試験に合格した後、最初の任地を選ぶ時に、中国を選ぶこともできたと思いましたが、そうはせず、米國を選みました。正直なところ、中国には全く魅力を感じていませんでした。当時は毛沢東の全盛時

中国問題は大事だから大いに勉強したまえ」とほつりと言われたのを記憶しています。

理由は詳しく語られませんが、若き日に通算10年近く中国各地に勤務し、苦勞した経験があるだけに、中国には特別の思い入れがあったようです。戦後、米軍占領下の日本で長年首相を務め、サンフランシスコ平和条約に署名（1951年）し、同日、日米安保条約にも署名した元首相としては、日本外交の基軸たる日米関係を、自分自ら基礎固めをしたが、日中関係は手付かずだ、だから諸君がしっかりとやってくれという叱咤（しった）激励の気持ちだったのでしょう。

(2面に続く)

# 令和つれづれ草



金子熊夫

そうした吉田さんの期待に添えて、同期の中で一人だけ中国語の研修を命じられ、台湾に行った人がいます。後年外務省で10年近くも中国国内は大荒れに荒れましたが、加藤君の中国語は基本的に一貫していたように思います。

田中角栄首相の訪中(72年)により日中関係が正常化してからは、彼は師匠の大平正芳外相(後に首相)の右腕として対中外交にまい進し、そのため日本国内では一部から「親中派」「媚中派」とみられた時期もありましたが、彼は生涯日中友好親善のために尽くしたと思います。

## 中国とどう付き合っていくべきか

その頃彼がよく言っていたのは「10億の国民を飢えさせず、腹いっぱい食わせるのは、それだけでも大変なことだ。それを共産党は何とかやっている」とのことです。それ

京飯店にチェックインしましたが、特別貴賓室を用意してくれていたのはびっくり。その部屋には、直前まで、社会党の成田知巳委員長が宿泊していたとのことで、室内の調度も一流品。食事は本格的な宮廷料理で家族も大満足。おそろしく日本の外交官ならとてもこれほど厚遇されなかつたでしょうが、国連の幹部職員というコネプにありましたが、とで、至れり尽くせりの待遇でした。



故加藤紘一氏

一方、私自身は、ワシントンからいきなりベトナム戦争中のサイゴン(現ホーチミン市)へ赴任し、そこで大変な目に遭いました(後日詳しくお話を予定)。68年秋に久しぶりに帰朝。本首都

その後、また暗いうちから外でサワサワという異常な音がするので窓越しにのぞいてみると、なんと物すごい数の人と自転車が、街灯もない暗い中、まるでウナカのようにうごめいていました。工場や職場へ向かう労働者たちでしょうが、みんな、例外なく黒い人民服、黒い帽子で、黒い自転車に乗っているの、まるでアリの大集団に取り囲まれたような不気味な感

「二つの中国」問題で苦労その後、1980年代半ばに私は、外務省傘下の日本国際問題研究所(東京都港区虎ノ門)に

エネルギー戦略研究会会長、元国連環境計画アジア太平洋地域代表、元東海大学教授(国際政治学)、新城市出身、83歳。



万里の長城での家族写真=1975年

同じような委員会は、アジア太平洋地域の主要国にできており、その上に大平洋経済協力会議(P.E.C.C.)という大きな組織があり、毎年いざなわれるが、中国が原則や面子に強くこだわる国だということを感じさせられたことはいくらもありません。

この原則とメンツへの強いこだわりは、古来中国外交の特徴であり、今後の同国との交際においては特に留意すべき点だと思われま

「次回へ続く」